View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

植草学園短期大学研究紀要　第17号　43～53頁（2016）

合宿保育における子どもの育ち
― 保育者養成との歩みから ―

Child's Growth in Training Camp Nurture: From the Pace with the Nurture Person Education

松原　敬子[1]　　鈴木　朱美[2]　　石川　明子[2]

幼児を取り巻く社会の現状は、あそびの時間・空間・仲間の三つの間（サンマ）がないといわれて久しい。遊ぶ時間が少なくなり、少子化によって遊ぶ仲間がいなくなり、さらに都市化で遊ぶ空間も減少してきたのである。ゆえに、保育現場においては、幼児のあそびの生活を保障していく役割が大きく求められているのである。そこで、保育者養成校と附属幼稚園が「特色ある教育・保育を行う」ことを目的とし「合宿保育」を協同し構築してきた。本稿では「合宿保育」における変遷から子どもの育ちを検証した。一方「合宿保育」においては、保育者養成との連携が欠かせず、学生が活動を通して幼児と積極的に関わる体験の機会を図った。保育者を目指す学生が保育者の資質の向上を示唆としていくものである。

キーワード：合宿保育、保育者養成、実践力

1．問題と目的

３歳から６歳の幼児を対象とした「幼児期運動指針」は、2012年３月に文部科学省から委嘱された幼児期運動指針作成委員会により公表された。「幼児期運動指針」では、特に幼児は毎日60分以上楽しく体を動かす遊びを中心に、散歩や手伝いなど家庭での身体活動も含めて、体を動かす機会を増やすことがねらいとされた。「幼児を取り巻く社会の現状と課題」では、社会環境や生活様式の変化から現代の幼児は体を動かして遊ぶ機会が減少しており、多様な動きの獲得や体力・運動能力の低下だけではなく、運動・スポーツに親しむ資質や能力の育成の阻害、意欲や気力が損なわれていくとある。幼児にとって体を動かして遊ぶ機会が減少することは、その後の児童期、青年期への運動や対人関係などコミュニケーションをうまく構築できないなど、子どもの心の発達にも重大な影響を及ぼすことにもなりかねないのである。幼児期に主体的に体を動かす遊びを中心とした身体活動を生活全体の中で確保していくことが大きな課題であるとされている。現代の子どもたちには、あそびの時間・空間・仲間の三つの間（サンマ）がないといわれている。つまり、習いごとや塾通いで忙しく遊ぶ時間が少なくなり、少子化によって遊ぶ仲間がいなくなり、さらに都市化で遊ぶ空間（場所）も減少してきたのである。ゆえに、保育現場においては幼児のあそびの生活を保障していく役割が大きく求められているのである。

そこで、保育者養成校と附属弁天幼稚園が「特色ある教育・保育を行う」ことを目的とし「合宿保育」を協同し構築してきた。2016年度より附属弁天幼稚園が「こども園」への移行に際し、本稿では「合宿保育」における変遷をまとめ、子どもの育ちを検証し、今後の「合宿保育」の有様を検討していくものとする。一方「合宿保育」においては、保育者養成との連携が欠かせず、学生が活動を通して幼児と積極的に関わる体験の機会を図ってきた。保育者を目指す学生が保育者の資質の向上を図る示唆としていきたい。

1　植草学園短期大学
2　植草学園大学附属弁天幼稚園

２．合宿保育の変遷

（１）1986年～2007年まで

昭和61年（1986年）９月初旬、植草学園短期大学の前身である植草幼児教育専門学校と協同し、第１回合宿保育が始まった。目的は専門学校と幼稚園が協力し合い「特色ある教育・保育を行う」ことであった。当時の養成校では、学生が園児や保護者と密接に関わることは少なく、教育・保育実習を行って初めて関わりを持つことができた。合宿保育に関わる学生は「大切なお子さん（命）を預かる」という意識を持ち、担当する園児のことを理解するために園児と保護者と学生との三者面談を行った。学生にとっては園児とより良い関係を築くこと、保護者との会話や振舞い方等、実習では得られない貴重な体験ができる場となった。また、合宿保育のプログラムや園児の生活について幼稚園教諭と打ち合わせをする機会もあり、保育計画の立て方や子どもの見方、配慮の仕方等多くの学びを得ていた。幼稚園としても園外でお泊まり保育をするということは単独ではなかなか実行に移すことが難しかったが、専門学校との協同ということで専門学校職員や学生のサポートを得て、「特色ある保育」の一つである合宿保育が実現となった。

合宿保育の内容は、御殿場YMCA東山荘を宿泊地とした１泊２日の園外でのお泊まり保育で、園児１名に対し学生１名が園児係りとなり合宿保育を進めていくこととした。（同じ時期，専門学校の全学生もYMCA東山荘を宿泊地として研修旅行を実施）

合宿保育を実施するためには計画だけでなく、現場の事前調査も十分に行った。合宿保育に関わる職員全員で学生が参加する研修コース（登山とハイキング）を歩き、園児と学生が一緒に過ごす施設内を見学し施設の方との綿密な打ち合わせを行った。それを持ち帰りそれぞれの場で計画の見直しや修正を行っていった。

園外合宿保育のねらいを①自分のできることは自分でする。②学生と一緒にいろいろな体験をする。この２つを設け、子どもたちの変化を保護者、保育者、学生の三者で観察していった。合宿保育の前に行う園児と学生の遊ぶ会（顔合わせ）では初対面でぎこちなさが多く見られたが、時間が経つうちに少しずつ打ち解けていった。園児、保護者、学生の三者面談では大人のほうが緊張していたが、子どもはすでに顔見知りの学生に心を開いている様子が見られた。

園外の合宿保育を実施する前に園内のお泊まり会を実施し、園児が泊まることに慣れてから園外で行ってはどうかとの話し合いをもち、年中児、年長児対象のお泊まり会を実施した。日ごろ生活している幼稚園であっても初めて親元を離れることは親も子どもも不安があった。保護者手作りの夕飯弁当を持参し、みんなでわいわい言いながら食べているが、なかにはすでに涙ぐんでいる子どもも見られた。園内オリエンテーションをしたり花火をしたりして楽しく過ごしてはいたが、やはりどうしても寂しくなってしまう子どももいた。他の子どもたちに気づかれないように保護者に迎えに来てもらい、次の日の朝食前に登園するということもあった。

第１回の合宿保育は学生が一日早く研修旅行に出発していたので東山荘での合流であった。東山荘の近くの公園を散策し、お弁当を食べて午後３時に園児係りの学生と合流。両者ともはじめは少し距離があったが、広い施設内を散歩したり話したりしているうちに、あっという間に仲良くなっていた。園児係りの学生と一緒に夕飯を食べ、その後学生が企画したキャンプファイヤーに参加した。園児係りだけでなく、学生全員が参加していたので、園児は少し戸惑い気味であったが、それでも初めてのキャンプファイヤーを十分楽しんでいた。学生よりも少し早めに部屋に帰り、入浴（園児係りと一緒）。21時には布団に入り疲れもあり、ほとんどの園児が眠りについていたが、周りが静かになると、思い出すのは家族のこと、お母さんのこと、シクシクと泣き、出す子もいた。他の園児が起きないように静かに隣の部屋に移動し、気を紛らわせたり添い寝をしたりして、落ち着いて眠れるようにした。園児が寝静まった後は、脱いだものが袋のなかにきちんと入っているか、弁当の空容器がリュックの中に入れたままになっていないかなど、職員が園児一人ひとりの荷物の確認をした。

２日目、早く起きた園児は学生と一緒に朝の散歩。セルフサービスで自分の食べられる分の量を学生に助けられながら、各自のテーブルに運び、みんなで朝食をいただいた。少し休憩をして、バスで15

分ほどの距離にある御殿場ファミリーランド（平成11年・1999年５月閉園）へ向かった。園児と学生が相談して、帰りの時間まで自由に行動する。（昼食は所定場所に集まり食事をする）帰りは園児と学生は同じバスに乗り、幼稚園までの時間を一緒に過ごした。幼稚園到着。すでに、保護者が迎えに来ているので、学生は挨拶と簡単な２日間の園児の様子を伝え、後日、再度報告会を行うことを伝え解散。２日間学生と一緒に過ごした園児は保護者に再会した安堵感と学生と別れる寂しさで泣き出す子もいた。３週間後に「合宿保育報告会」を開催し、学生が保護者に２日間の子どもの様子や気持ちの変化などを報告した。学生の真摯な態度や丁寧な報告に保護者も感激している様子が見られた。また、合宿保育後の直後ではないが、子どもたちにも変化が見られた。「なんとなく逞しくなったようだ」「自分のことを自分で行うことが多くなった」等、保護者の声が聞かれるようになった。

３回目の合宿保育頃から「園児係りの学生は園児に関わることを主とする」となり、キャンプファイヤーも園児係りと園児のキャンプファイヤーとし、入浴準備まで園児と関わった。（その後学生は学生全体のキャンプファイヤーや学生同士の交流会に参加）合宿保育の内容も少しずつ見直しをしていき、東山荘内の広い芝生の上で飛行機を飛ばしたりシャボン玉をしたり、みんなでスイカ割りをしたこともあった。園児係りの学生と一緒に活動する場所として、箱根園水族館、箱根町森のふれあい館，御殿場ファミリーランド、富士サファリパーク、大涌谷から芦ノ湖等を利用した。特に大涌谷の自然散策コースを歩いて噴煙地を見たり、黒卵を食べたりしてロープウェイに乗り、芦ノ湖までの景色を見ることなどは子どもたちにとっても印象深かったようである。

平成10年（1998年）ころから社会情勢や交通事情等の変化により園外での合宿保育を見直したいという意見が出始めた。既に10年以上実施してきた為、今すぐにというわけにはいかず、専門学校を含め話し合いを続けてきた。

（２）2005年～2007年まで

平成17年（2005年）は園舎・校舎の耐震工事の関係上、前年度から「17年度の合宿保育は行わない」と保護者に伝えていたところ、「合宿保育をぜひ行ってほしい」という強い要望があった。また、保護者アンケートにより、園児と保護者にとっての「合宿保育」は私たちが思っている以上に期待が大きいことが分かった。急遽会議を開き実施に向けての準備を始めた。

①宿泊地の決定（清和県民の森公園）
②園児係りの依頼（養成校）
③交通機関（養成校関係）
④活動場所について（マザー牧場）
⑤合宿保育内容作成

ただし、17年度の合宿保育は年長児の希望者のみということにした。

平成18年度からは、年中児の体力的なことを考慮し、年長児のみの参加になった。宿泊場所も県内の佐倉草ぶえの丘に変更した。この年の合宿保育は、１日目は成田航空博物館で園児係りと過ごし、午後には草ぶえの丘に到着し、今までどおりキャンプファイヤーを行った。２目は施設内の陶芸コーナーでお皿作りの体験をし、広場の遊具で遊んだり、ミニＳＬに乗ったりして過ごした。19年度は、１日目の活動を葛西臨海公園にした。

（３）2008年～2015年まで

平成20年（2008年）植草幼児教育専門学校と植草短期大学の合流により合宿保育は幼稚園独自のものと形を変え、園児係りも学生のボランティアとなった。今まで年中児も参加していたので、活動内容を少し変化させていたが、年長児のみの活動になり１日目の内容を「千葉こどもの国」で過ごすことに定着させた。19年度まで同じ敷地内に養成校と幼稚園があり、打ち合わせや学生指導等がすぐにできたが、短期大学が離れているため、事前の打ち合わせ、一緒に遊ぶ会（園児と学生）や学生オリエンテーション等は幼稚園の夏季保育中に行い、数日後に合宿保育を実施することにした。これは、幼稚園、短期大学共に夏季休業期間のため、他学年の保育や学生の授業に支障がないことも幸いしていた。

このような形を６年間続けてきたが、平成28年から「こども園」に移行することにより、平成27年度から既に子どもたちの日課や職員の勤務体制もこど

も園を想定し、進めてきているなか、合宿保育に関わる職員も削減となり、打ち合わせのために時間調整が必要になった。また「お泊り保育」も行わなくなり、今までとは様々なことが変化してきているなか、合宿保育について改めて考えていかなければならない時期を迎えている。

３．合宿保育までの日程（準備）及びその後の活動

①１月下旬　宿泊場所予約
②４月中旬　見学場所予約
③４月下旬　合宿保育参加園児調査
④４月下旬　ボランティア学生募集
⑤７月上旬　宿泊・見学場所事前調査
⑥７月上旬　園児・担当学生ペア決め
⑦７月中旬　日程表完成
⑧７月下旬　学生オリエンテーション
⑨７月下旬　保護者説明会
⑩８月下旬「遊ぶ会」最終オリエンテーション
⑪８月下旬　合宿保育当日
⑫９月中旬　ダイアリー完成（園児に渡す）
⑬９月下旬　報告書・決算書保護者へ配布
⑭12月上旬「お楽しみ会（まとめの会）」
※学生は運動会・卒園式に任意で参加する。

４．子どもの育ち

（１）Ａについて

年長児クラスのＡ（中度発達遅滞）は、双子の兄と共に通園していた。「お泊り保育」は年中・年長の２学年が園に泊まる行事で７月に行っていたが、年中時は保護者から泊まらずに数時間園で過ごして帰宅するというように提案をされた。しかしながら、副園長や療育センターのアドバイスにより「お泊り保育」を経験することができた。この経験により、保護者は迷わず合宿保育に参加させることができた。園児はＡに限らず、家族と離れ宿泊をすることが楽しみな面と不安な気持ちで複雑な思いに駆られる。特にＡには期待感が持てるように、友達や先生、学生と一緒にいろいろな経験ができることなどを知らせながら進めていった。また、保護者も同様に不安を感じているので、当日を迎えるまでに合宿保育のねらいや活動内容を知らせたり、今までの園児の様子を話したりしながら安心して参加できるよう配慮した。

以下は、各活動における様子である。

１）遊ぶ会

Ａには、Ｃ男が担当することになった。

園児と学生の初顔合わせの日には、事前にＡの興味を持っていることや日常の様子など担任教諭から担当学生のＣ男に伝えていたが、Ｃ男も信頼関係が作れるだろうかと不安な気持ちで緊張していた。Ａは初めての環境や日常と異なった活動になると警戒したり、パニックを起こしたりすることがあるため、学生と関わることは難しいと予想していた。心配とは裏腹に会話をすることはなかったが、戸惑いながらもＣ男と手を繋ぐことができた。

２）合宿保育

「遊ぶ会」で数時間一緒に過ごしたからこそ、緊張する様子もなくＡ自身からＣ男の傍に近づいていった。幼稚園を出発してからはＡとＣ男との関わりが多くなり、職員は様子を見守り必要に応じて対応した。

①見学場所「千葉こどもの国」

Ｃ男の思いとしては、Ａに友達と一緒に過ごしたり乗り物に乗ったりといろいろな経験をしてほしいという願いがあった。しかし、Ａは友達の遊んでいる様子を見て楽しんで満足していた。何度も誘ってみるが状況は変わらず園内を歩いているだけだった。唯一ローラースケートの場所では長い時間、その場を離れず様子を見ていた。Ｃ男が誘ってみるとＡから「やる！」と興味を示した。いつもは苦手なことや失敗すると癇癪を起し、その場からいなくなったり、諦めてしまったりすることが多かったが、何度転んでも挑戦し、友達の様子を見ていたり長い時間楽しんだりする姿があった。その後は単独行動ではなく、友達と一緒に公園内を散歩している様子も見られた。

②宿泊場所「佐倉草ぶえの丘」

園児等は、「千葉こどもの国」で思う存分に遊び、担当学生との信頼関係も少しずつ築くことができ安心して過ごしていたが、まだ不安で保護者を思い出し涙ぐむ園児と心情もさまざまであった。

Ａは相変わらずマイペースで行動をしていたが、キャンプファイヤーなどみんなと一緒に行う活動は

楽しそうに参加した。「肝試し」では、少し怖がり躊躇する場面もあったが、C男の手を握って最後まで参加することができた。AはC男を信頼し、傍にいるだけで安心できる存在になっていた。友達と一緒に寝る経験はしているが、入浴することは初めての経験であった。入浴は職員が担当した。他児は入浴をとても楽しみにしていたが、Aは入浴を嫌がり風呂場で大騒ぎであった。水を恐がりプール遊びも苦手であり、予測はしていたが、大泣きであった。不安が少なくなるように職員が抱きかかえて入浴した。無理強いをせずにAのペースに合わせ、身の回りの支度や食事をしながら、過ごしていった。「遊ぶ会」の時には不安感が大きかったC男の気持も父親のような感情に変わり、Aからスキンシップを求めてくるようになり、お互いに親近感を感じていた。

降園時には、担任教諭から保護者へ２日間の様子と学生からも個々に話をする時間を設けていた。C男からAの様子を聞いた保護者は「Aらしい」と家庭での様子と変わらなかった様子にとても喜び、安堵した様子であった。

（２）Aの育ち

新しい環境にすぐに馴染めないAではあったが、C男がAの個性や特質に考慮しながら気持ちに寄り添い、思いを大切にして関わったことで、自分の居場所を確保できた。安心感の中でやってみたいことが見つかり、取り組もうという意欲が生まれた。信頼関係を築くことができ、Aの気持ちも変化していった。A自身も他児に興味を示し自ら関わり、諦めずに挑戦しようとする姿を見ることができた。

双子の兄のBは、園生活において弟をいつも気に掛けながら我慢することも多く、心配をして傍にいることが多かった。合宿保育中はBも学生と一緒に過ごしていたので、Aのことを気に掛けながらも自分の行いたいことを思う存分に体験することができた。

（３）合宿保育の経験を通して

卒園後４年間同窓会を行っている。「幼稚園での思い出は」と質問すると、ほとんどの卒園生が「合宿保育」と答えが返ってくる。合宿保育の様子や園児の健康チェック、保護者や学生のメッセージなどが書かれたダイアリーを卒園後も見返し、親子でその当時の思い出話をしている子もいた。友達と一緒に過ごしたこと、楽しんだこと、挑戦したことなど子どもたちの心の中に残っているのだ。学生と関わる機会は何度もあるが、１対１で２日間一緒に過ごすことはない。また限られた人間関係の中で生活している子どもたちにとっては、家族や保育者以外の人と触れ合ったり、交流を持ったりすることで、近親者とは違うかかわりを持つことが出来た。合宿保育後には、合宿保育に参加した学生と何度か会う機会がある。子どもたちはその日をとても楽しみにしている。これから先、子どもたちが成長していくなかで、たくさんの人との出合いがあると思うが、合宿保育での学生との出合いは、とても貴重な体験である。

合宿保育では、楽しさばかりではなく、寂しさや我慢、そして自分で決めなくてはいけないこともあり、さまざまな気持を経験する。参加したことで、「○○ができるようになった」とすぐに子どもたちの変化が見られるのではなく、今後子どもたちが生活し活動していく様々な場面において成長した姿が見られるようになるのである。

子どもたちは、依存と自立の関係を十分に経験することで人との関わり方を学んでいく。安心感の中で自分の存在を認められ、自分の力で様々な活動に取り組み、自己肯定感や充実感を味わうことができるのだ。

（４）合宿保育の回想

園外に出て宿泊するため、「お泊り保育」の時よりも緊張と不安が大きかった。学生と園児、保護者と学生、職員と学生、職員と保護者と繰り返し行った打ち合わせや顔合わせが出来たのは幼児教育専門学校と附属幼稚園が同じ敷地内にあり、いつでも相談が可能な素晴らしい環境の中で進められることが出来たからである。日に日にみんなの気持ちが不安から期待へと変化していく心情も感じることもできた。合宿保育へ向かって一丸となって当日を迎えた。夏季休業中には、幼児教育専門学校の先生方と事前調査に行き、両職員の関わりも一層深められた。卒業して恩師の先生方と共に過ごせたよき思い出である。

以前は、箱根周辺で合宿保育を実施していた。トイレ休憩を数回取りながら、２時間30分近くバスに乗って宿泊施設へ向かった。帰路では渋滞になり到着予定時間よりもかなり遅く着いたこともあった。当時も子どもたちの安全を第一に考え行動していたが、数十年前と今とでは社会事情がとても違うので、今は当時と同じように行うことは出来ないであろう。

幼児教育専門学校が大学と統合する年に合宿保育を行わないという提案をしたが、保護者からの要望が強く、場所は変更したが、続行することになった。

今でも心に残っている合宿保育は千葉で宿泊や見学場所を決めた年である。年長組が希望者のみ参加した。日程は山、川遊びであったということもあって女児は１名の参加であった。自然の中で思いっきり遊ばせたいという願いがあり、スイカ割りを行なったり、川で泳いだりと、友達と一緒にいろいろな体験し子どもたちは充実した時間を過ごしていた。学生の一人が足を滑らせ怪我をしてしまった。心配しないように子どもには知らせず、副園長が学生に付き添い帰宅させた。大人だから大丈夫と少し考えが甘かった。園児と同様に学生の安全面を配慮しなくてはいけなかったと反省した。事前調査した道を通ってバスまで歩いていったが、その時と違ってアップダウンの激しい道になっていた。綱を持って下山したり、滑りやすい道だったり危険な道を歩いた。学生の怪我のこともあり、ペアになった園児だけでなく、全園児を全員で守りながら緊張感の中、今まで以上に全職員が子どもたちの命を守るという責任感を強く感じ、気持ちが一つになったことを今でも忘れない。大事なお子さんを預かり、何事もなく保護者にお返しできたこと、無事に終了できたことを心から感謝し安堵した。

合宿保育は、保護者が子どもたちへの精神面や健康面のケアーや準備など保護者の協力があってこそ実現できる行事だと、毎年感謝の念を抱いている。さらに、今後も継続していきたい行事である。

５．保護者の声

合宿保育は、昭和61年からすでに30回も行ってきているので、幼稚園の「特色ある保育」のひとつとして定着している。幼稚園選びをする保護者のなかには，特色ある保育のひとつとして「合宿保育があるから」ということをあげている方も少なくない。平成17年度の「合宿保育中止」に対しても父母の会でアンケート調査を行い，前述の合宿保育の変遷のとおり、実施に向けての要望が多かった。

今回は、「こども園」移行に伴い今後の合宿保育を行う上で保護者や園児の声を聞くためにアンケートを実施した。年長児の参加者全員に協力を得た。回収率は84パーセントであった。（参加者33名、提出28名）

（１）アンケート結果のまとめ

今年度から、合宿保育前の園内のお泊り保育を実施しないことになったので園児や保護者にとっては不安が大きかったことだろう。しかし、このアンケートから園児が困ったことや大変だと感じたことが少ないことがわかる。それは、学生との信頼関係が大きく影響していたからだ。嬉しかったこと、楽しかったことの多くがボランティアの学生と一緒に遊んだこと、一緒に過ごしたこと、仲良くなったことが多く、信頼関係が築かれていたことがわかる。

また、学生の対応についても78％が良いと回答していた。保護者からも好感をもたれたようである。それは，ダイアリーの作成についての解答「細かく丁寧に２日間の様子がよくわかるように書かれていて感動した」からもわかる。園児が困ったことや大変だったことは日々の生活の中でも起こりうることで、その困りごと等については学生に手伝ってもらい、話したりしていて長引くことはなかったようである。

合宿の費用（13,000円）については、「適当」の回答（66％）が多く、支出内容を理解してもらえていた。「安いことに越したことはない」「……家計に優しい費用にしてほしい」の意見も子育て中の家庭にとってはそのとおりだと理解できる。遊ぶ会やお楽しみ会（まとめの会）のことについては子どもの安心感や信頼関係を築く上で大切なことと理解してもらえているようだ。学生ボランティアについては、全員が「園児一人に対し学生一人がよい」と回答。安全面や親心を思うと当然のことといえよう。感想から、子どものことを考え企画・計画をすること、ボランティアの学生は園児個々についていた方

が保護者としては安心できる、ダイアリーは子どもの宝物になる園児、学生、保護者の信頼関係が大切だ。何より子どもも親もよい経験や学びが出来たこと、これからも継続してほしいという意見が多く、30年間実施してきた合宿保育の集大成といえよう。

今後「こども園」に移行することで様々な課題が既に見えているが、今回の保護者、園児の意見や今まで実施してきたことを大切にし、さらに充実した合宿保育を実施できるようにしていきたい。

６．保育者養成校との連携

平成20年（2008年）からは、ボランティアとして２年生に参加を募っている。年々、希望者も多くなり、保育者を目指す学生の目的意識が定着してきた。実習と同様に心構えや服装、身だしなみ等に配慮し、担当園児を預かる責任感を持って臨んでいる。

ここに学生の声をまとめた。

（１）研究方法

対象：平成27年度合宿保育参加学生36名

調査期間：平成27年12月３日～18日

調査方法：アンケート記述式（回収率100％）

１）遊ぶ会

学生と園児が初めて顔合わせをし、ペアになって活動をした。

・日時：平成27年８月20日９：30～11：30

・場所：植草学園大学附属弁天幼稚園

・日程：

９：00　園児登園
９：15　学生集合
９：30　遊戯室待機
９：35　副園長先生の話
９：40　ほし組遊戯室へ移動
９：45　園児と学生ペアを組む
10：00　「遊ぶ会」開始
10：05　「でかけよう」のふれあい遊びを行う
10：10　「ジャンケン列車」「ザバザバ体操」
10：15　ほし組移動
10：30　プール遊び開始
10：50　プール遊び終了
11：30　降園・保護者と顔合わせ

２）合宿保育オリエンテーション

①副園長先生のお話
②当日の日程につい
③園児の持ち物について
④ダイアリーについて（書き方・提出日等）
⑤小遣いについて　　（書き方・提出日等）
⑥松原先生のお話
⑦各園児について（担当：担任）

３）合宿保育

・期間：平成27年８月23日～24日

・宿泊場所：佐倉草ぶえの丘

・見学場所：千葉こどもの国キッズダム

４）お楽しみ会（まとめの会）

・日時：平成27年12月２日９：30～15：00

・場所：植草学園大学附属弁天幼稚園

（２）学生の声

１）園児に関わって

①　嬉しかったこと

・自分のことを覚えて会うと探し、飛んできてくれたこと。
・１泊２日一緒に過ごし仲良くなれたこと
・ペアの行動だったので気持ちも引き締まり、愛情も大きくなった。
・信頼関係が築けたこと。
・成長が感じられたこと。
・帰る際に泣きながら、ぎゅっと抱きついてくれたこと。
・子どもの楽しそうな姿や、笑顔を見ることができたこと。
・すべてが嬉しかった。
・子どもが考えていることを自分が理解できたこと。
・やきもちを妬いてくれたこと
・担当園児、保護者の方から手紙をもらえたこと。
・「僕のお姉さん！」と言ってくれたこと
・嬉しいことがあると一番に伝えに来てくれたこと。
・一緒にいろいろなものを作ったり、食べたりしたこと。
・子どもが普段の話をしてくれたこと。
・「先生」と認識してくれたとき。
・帰る時間になると「嫌だ！」と言ってくれたこと。
・一緒に遊ぶことをすごく楽しみにしていてくれた

こと。
・自分のことを頼ってくれたこと。
・おいしいものを一緒に食べて「おいしいね」と言い合えたとき。
② 楽しかったこと
・ペアの子とたくさん遊べたこと。
・合宿保育以外にも交流があったこと。
・遊びや食事－寝ること全てが楽しかった。
・親の気持ちになって楽しかった。
・子どもが喜ぶ姿、楽しんでいる姿を見ることが楽しかった。
・キャンプファイヤー、キッズダムでの１日、バスでの移動時間。
③ 困ったこと・大変だと感じたこと
・お金の使い方の相談
・時間内でやりたいことを少しでも多くできるようにすること。
・安全面や健康面での配慮（体調管理、怪我をしないように見守ること）
・お母さんに会えなくてさびしい気持ちに気づけなかったこと。
・好きなこと、嫌いなこと、担当園児の生活リズムが分からず、寄り添えるか不安だった。
・子どもがダイアリーを書いてくれなかったこと。
・担当園児が男の子だったため、トイレで一人になってしまうことが不安だった。
・多目的トイレが少なく、おむつを変えるときに困った。
・自分がトイレに行くときに困った。
（担当園児を他の学生に預けなければならなかったから）
・気に入った乗物から離れなかったとき
・夜目が覚めてしまい寝かしつけること。
・食べ物の好き嫌いがあったとき
・友達と喧嘩をしてしまい泣いてしまったとき（泣き止むのに時間が掛かり、自分の声掛けに対する力不足に悩んだ。）
・わんぱく池後の着替え
・荷物の多さ（自分の荷物を軽くするべきだった。）
・一緒に遊ぶが体力がまけてしまうこと。
・疲れが出る。（保護者の大変さ、子育てのたいへんさが分かった。）
・食事の際に話が進んでしまい、食べないときなどがあった。
・自分より子どもを優先させなければならないこと
・写真が苦手で撮らせてもらえなかった。
・多くの子と関わっているときに落ち着いて対応できずに大変だった。
・なかなか仲良くなれなかったこと
・マイナスなことを口にしてしまうことが多い子だったのでどのような言葉を返せばよいのか分からなかった。（自分がプラスのことを言うと会話も楽しめた。）
・身の回りの世話
・子どもの思いをくみ取ること。
2）保護者と関わって気にかけたこと
・安心して預かるように対応した。
・笑顔、言葉遣いを気にかけた。
・挨拶をしっかりとして、第一印象を大切にした。
・伝えたいことは具体的に、出来るだけ完結にまとめて話す。
・大切な子どもを預からせていただいていること。
・自分がどういう人か知ってもらえるように話した。
・保護者の方の話をよく聞く。（子どもの援助や配慮すべき点などを聞き、心配をかけないようにした。）
・明るく目を見て話す。
・話の切り上げタイミングを気にかけた。
・怪我や健康面での子どもの様子を連絡や報告をした。
・敬語や態度、表情に気を付けた。
・マイナスのことは言わない。
・子どものいいところ、頑張っていたところをたくさん伝える。
・それぞれの子どもに不安な要素があり、一度しかあったことがない人に預けることはとても不安だったと思った。（小さな出来事でも伝えていく大切さを実感した。）
・特に気にかけなかった。
3）ダイアリーの記入について感じたこと
・子どもができたみたいで、作ることが楽しかった。
・我が子と保護者の方に良かったと思ってもらえるように、見ながら楽しんでもらえるように頑張った。
・喜んでいるところを想像して作るのが楽しかった。
・写真を見て振り返ることができた。

・書く場所が多くあり、書きやすかった。
・運動会の時「ダイアリーで２日間の様子が凄くわかって、すごくかわいく作ってくれてありがとう。大切にするね。」と言っていただき、形に残すことの大切さを実感した。
・子どもの宝物になればいいと思った。
・保護者の方に写真と言葉で伝えることは難しいがとても良い。
・子どもや保護者の思い出にもなるが、自分の宝物にもなる。
・最初はこんなに書けないと思っていたが、書き始めるとまとめるのが大変なほど書きたいことがあった。
・もう少し、大きいサイズでもいいのではと思った。
・全てひらがなで書くことが大変だった。
・貴重な経験になった。
・だんだんと子どもの表情が豊かになっていく様子が本当に嬉しかった。
・もらって大切にしたくなるように、見返した時に少しでも思い出してくれるようなダイアリーを作ろうと思った。

４）参加費2,500円（１泊２食付）について

【安い】
・食べて泊まれて最高・食事代、キッズダム入場料、バス代込みだと安いと思った・充実している・たくさんの良い経験ができたから、行く気になりやすい値段・一生の経験、思い出になるから

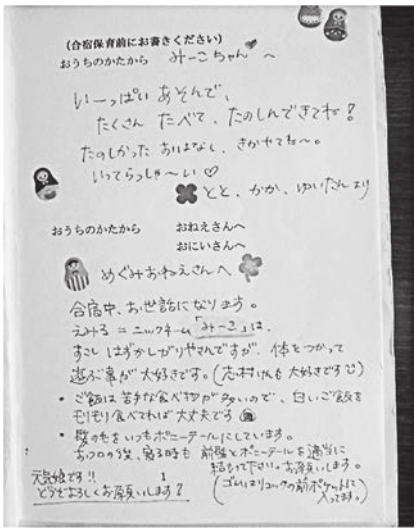
【適当】
・安すぎず高すぎないところ・少し余ってしまったのでこれくらいで良いと思った・学生でも出せる金額だから・やや高いと感じたが参加したかいがあったから

【やや高い】
・２日間くさぶえの丘から動かなかったのにもう少し安くてもいいのかと思った。

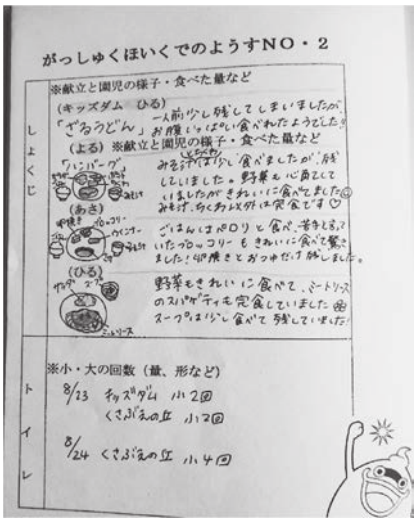
表１　参加費 2,500 円について

項目	回答学生 36 名
高い	0 名
やや高い	2 名
適当	20 名
安い	14 名

【ダイアリー抜粋より】

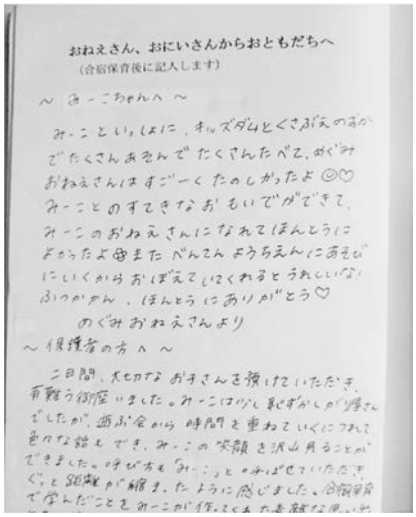


No.1　おうちのかたから



No.2　がっしゅくほいくでのようす

No.3　なんでもアルバム



おねえさん、おにいさんからおともだちへ
（合宿保育後に記入します）

～ みーこちゃんへ ～

みーことといっしょに、キッズダムとくさぶえのまかで たくさんあそんで たくさんたべて、めぐみおねえさんはすごーく たのしかったよ ◎♡
みーことのすてきなおもいでができて、みーこのおねえさんになれてほんとうによかったよ また べんてんようちえんにあそびにいくから おぼえていてくれるとうれしいな
ふつかかん、ほんとうにありがとう♡
めぐみおねえさんより

～ 保護者の方へ ～

二日間、大切なお子さんを預けていただき、有難う御座いました。みーこは少し恥ずかしがり屋さんでしたが、遊ぶ会から 時間を重ねていくにつれて色々な話をでき、みーこの笑顔を沢山見ることができました。呼び方も「みーこ」と呼ばせていただきぐっと距離が縮まったように感じました。合宿保育で学んだことをみーこが作ってくれた素敵な思い出

No.4　おにいさんおねえさんからおともだちへ

（3）学生の育ち

ここでは、学生の振り返りを記す。

1）遊ぶ会

ペアのDに初めて対面した時はとても緊張していて心を開いてくれるかとても不安だった。しかし、遊ぶ会のふれあい遊びやレクリエーション通して次第に会話も増え、お互いのことを話すことができるようになった。Dは、とても照れ屋で笑顔が可愛い女の子であった。次第に、少し照れながらも膝に座り、自ら話しかけてくれるようになった。私自身もDがリラックスして接してくれるような声掛けをし、スキンシップをとるように心がけた。会が終わるころには、合宿保育を楽しみに思う気持ちが大きくなった。遊ぶ会でのDの印象は、照れ屋で笑顔が可愛い女の子だと感じた。

2）合宿保育

合宿保育では、時には友達のように一緒に遊び、時には親子のように接し、楽しかった思い出が沢山ある。寝食を共にしたことで信頼関係も深まったと思う。Dは運動がとても得意なようであった。移動も走ることが多く、とても活発で元気いっぱいだった。しかし食事の面では、苦手な食べ物が多かった。昼食を自由にとることができるキッズダムでは、保護者の方と事前にリサーチしたメニューを食べることができ、とても喜んでいた。草ぶえの丘では苦手な野菜やおかずなどは少し残してしまっていたが、私が声をかけてみると頑張って食べることが出来ていた。短い間だったが、野菜を食べ切ることができた日はDの成長を感じ、私自身もとても嬉しかった。就寝時は、汗をかきながら寝ていて、汗をかいているだけでもとても心配で、担任の先生に聞きに行ってしまった。熱があるのか、寝苦しいのか、全くわからず、先生に聞いてみると、「子どもは寝るとき体温も上がって汗かく時もあるから少し様子をみていれば大丈夫よ」と言ってくださった。ホッとしたと同時に自分が本当に我が子と思えるほどの愛着がわいていることを実感した。

3）お楽しみ会

お楽しみ会では、ゼミの活動で「ももたろう」の劇を行った。担当園児や学生に見てもらえるともあり、とても緊張していたがすごく楽しみだった。演技している際、担当園児を見つけることができ、身を乗り出して観ていてくれ、とても嬉しかった。劇後の外遊びの時間などでは「お姉さんは鬼役だったよね。すぐにわかったよ。」などと感想を話してくれ、がんばって準備や練習をしたやりがいを感じた。また年長クラスで運動会のときに披露していた「パラバルーン」を間近で見ることができた。運動会でのパラバルーンを見たときは、前奏で子どもたちが出てきた瞬間から涙が溢れ、とても感動した。また同様にお楽しみ会でのパラバルーンでも子どもたちの凛とした姿が新鮮でとても心に残っている。

お楽しみ会を終えてのお別れは、とても寂しかった。遊ぶ会・合宿保育・お楽しみ会、すべての行事が終わってしまい、交流がなくなってしまうのは悲しかった。しかし、Dとの思い出はとても大きくこれからも大切にし、次に会う機会を楽しみにしたい。

（4）考察

事前の「遊ぶ会」では、緊張の中にも期待で胸が膨らみ担当園児と初めて対面するが、降園時にはすっかり打ち解けていた。合宿保育が楽しみになったと学生からの声も多く聞かれた。当日は担当園児と寝食を共にし、どのペアも時には親友のように遊び、時には親子のように思えるほど仲が良くなっていた。学生たちが園児に優しく接し、子どもたちも学生を信頼して甘えている姿がとても微笑ましい。子どもの気持ちを受け止めきれなかった時などは、信頼関係の形成は簡単なことではなく、子どもたち

の気持ちに寄り添い、思いきり関わり、一緒に多く遊ぶことで少しずつ芽生えていくことを肌で感じとることができた。一方、子どもを持つ親の大変さをも実感し、さらには、保護者と面談する機会では、改めて子どもの命を預かる責任の重さや安全に対する配慮を学んでいく。保護者への報告会では、学生たちが子どもたちの様子を伝え、保護者からは感謝の言葉に涙ぐむ学生もいた。また、合宿保育後の「運動会」や「お楽しみ会」では担当園児と再会し、我が子のように成長した姿や活動に目を細め、大きな感動を味わえた。様々な体験が得られる合宿保育は、学生にとっても心に残る一生の思い出になっている。

７．まとめ

子どもの心とからだを育んでいくためには、自然との関わりが重要である。自然物は子どもに感性を呼び覚ましてくれる。興味関心の対象の幅が広がり、子どもの意欲や主体性が育まれていくのである。また、子どもにとってできなかったことができるようになり、少しがんばればできそうな自分を発見することは、大きな喜びでもある。次の目当てを持てるような声かけ、挑戦できる場、手ごたえのある環境を用意することは子どもの自信を育てていくことに繋がる。自己肯定感や有能感が持てる「合宿保育」の実践は、子どもたちに自信を与え、子どもの育ちに大きな成果があった。今後も「こども園」としての行事に繋げていくことが期待されるものである。

さらに、オリエンテーションから始まり「遊ぶ会」「合宿保育」「お楽しみ会」と続く一連の活動は、学生にとっても心に残る貴重な経験となり、保育者への道を大きく前進させた。子どもたちのいきいきとした未来に向け、今後も保育現場と養成校が共に歩んでいきたい。

写真１「千葉こどもの国キッズダム」帰路

写真２　朝の布団片づけ

参考文献

１）文部科学省「幼児期運動指針」2012
２）松原敬子「心とからだを育む運動あそびの魅力」の検証　植草学園短期大学紀要第14号　pp.35-44. 2013
３）松原敬子「保育者養成における学生の育ち～合宿保育の取り組みから～」第64回日本保育学会　2011